

## E-7

### インド英語における *general extenders* の特徴について ー内圏・外圏の他英語とのコーパスを用いた共時的比較分析ー

高橋真理子（関西学院大学）

#### 1. はじめに

Crystal (2012)によると、インドには2億人を超える英語話者が存在し、その大半は英語を第二言語として使用している(p.63)。英語は世界各地で話され、英語の使用地域は Inner Circle（内圏：第一言語話者、いわゆるネイティブ英語話者が多い地域）・Outer Circle（外圏：第二言語話者が多い地域、英語が現在も公用語や準公用語の1つである場合が多い）・Expanding Circle（拡大圏：外国語として学習・使用する話者が多い地域）の3つに大きく分類されてきた(B. B. Kachru, 1992)。そして、各地で使用される英語には、地域ごとの特徴が発達してきた(Y. Kachru & Smith, 2009)。インドは外圏に分類されるアジア地域のうち、最大の英語第二言語話者数を有する国であり、インド英語には地域的な特徴が発達している(B. B. Kachru, 1992; Sedlatschek, 2009)。本研究で焦点を向けるのは、ICE プロジェクト（2.手法を参照）で扱われている、各地域の“standard English”である。インドでは多様な言語が第一言語として話されているため、standard English も特に発音面において均質ではない(Mukherjee, 2012, p. 174)。しかし文法面においては、国内の“non-standard dialects”に比べて話者間の違いが小さい(Gupta, 2010, pp.58-59)。

会話において「曖昧表現」が使われる理由の一つは、曖昧表現が「正確な表現」よりも効果的に意図や含意を伝えられるからである (Jucker, Smith, & Lüdge, 2003)。内圏の英語話者と同様、インド英語話者も曖昧表現を用いる。英語の会話で用いられる一連の曖昧表現に General extenders がある。General extenders (GE)は、You should bring water, towels, *and things like that* や I would like to have Tandoori chicken *or something* のように、典型的には接続詞と名詞句で構成され、文末に出現することが多い(Martínez, 2011)。より具体的には、接続詞の後に数量詞を伴う総称名詞が続き、その後ろに比較語が続くが、すべての要素が必須ではない(Tagliamonte & Denis, 2010)。また、GE は and から始まる順接の GE と or から始まる離接の GE に大別される(Tagliamonte & Denis, 2010)。GE は“set-marking tags”と呼ばれる場合もある(Dines, 1980)。

GE の研究は 1980 年代から、イギリス英語(Martínez, 2011)やアメリカ英語(Overstreet & Yule, 1997)など、内圏の英語を主な対象として行われてきた。単一の英語を対象とした研究が中心であるが、例えば Pichler and Levey (2011)はインスタントメッセージにおいて、第一言語話者と英語学習者が用いる GE を比較し、第一言語話者の方が GE を、グループ・アイデンティティ表示のために、より頻繁に使用することを明らかにした (p. 2620)。しかし、英語を外国語としてではなく、第二言語として使用する話者の多い地域、すなわち外圏の英語における GE に着目した研究はより少なく、内圏の英語に加えてシンガポール英語の GE を扱った Aijmer (2013)やフィリピン英語と香港英語を扱った Takahashi (2015)などに限られている。

GE の先行研究の焦点は形式的特徴・機能的特徴・社会言語学的特徴に当てられてきた。形式面においては、GE には様々な形式があることが示されるとともに (Overstreet & Yule, 1997)、総称名詞と指示対象の一致についての分析も行われ、総称名詞が可算名詞に対して使われるなど、一致度の低下が示されてきた (Tagliamonte & Denis, 2010, p. 8)。これに関して Cheshire (2007)は、イギリス英語において特に、“and that”と“and everything”という2形式の GE において脱範疇化が起り、文法化の進行が見られ

ると述べている(p.188)。機能面では、Dines(1980)が GE の主要機能として初めに提示した機能が *set-marking* (指示対象が、より大きなグループに属するものの一例と示す) であり、その後の研究でポライトネスの表示、グループ・アイデンティティの表示、話者交替の表示、さらには強調といった機能が特定されてきた (Overstreet, 2005; Wagner, Hesson, Bybel, & Little, 2015)。社会言語学面では、女性は男性に比べて順接の GE を多く使う傾向(Levey, 2012)や、10 代の話者は GE をグループ・アイデンティティ表示に最も使う傾向(Martínez, 2011)があることが示されてきた。

本研究では、主要なアジア英語の中で、GE の体系的な研究が今まで行われていない、インド英語に着目する。そして、インド英語の GE の形式・機能の特徴について、内圏・外圏の 5 つの他英語(アメリカ・イギリス・フィリピン・香港・シンガポール)と共時的に比較して分析を行うことを目的とする。

## 2. 手法

インド英語の GE のデータは、英語の地域的特徴の分析・比較のために編纂された International Corpus of English(ICE)のインド英語コーパス(ICE-IND, Shastri & Leitner, 2002)の会話コーパス(S1A, 20 万語)から、上述の GE の定義 (Tagliamonte & Denis, 2010) に合致する表現(接続詞+ 数量詞+ 総称名詞+ 比較語:すべての要素が必須ではない)を AntConc (Anthony, 2011)のコンコーダンス・ツールを用いて抽出した。and または or を含む部分を検索し、並び替えて GE に該当する表現を抽出するとともに、先行研究のデータも参考に GE の検索を行った。また、ランダムに選択した 10 ファイルを読んで確認し、他にも GE の形式がないか確認を行った。他英語のデータは、アメリカ英語・イギリス英語・シンガポール英語については Aijmer (2013)に、香港英語・フィリピン英語については Takahashi (2015)に示されたデータを用いることとした。アメリカ英語以外のデータは、それぞれの ICE コーパスの会話コーパス(イギリス英語 ICE-GB、シンガポール英語 ICE-SIN、香港英語 ICE-HK、フィリピン英語 ICE-PHI の S1A; インド英語 ICE-IND の S1A とそれぞれ同じサイズ)から抽出されている。アメリカ英語の GE に関して Aijmer (2013)は、将来的に ICE-USA の会話コーパスとして使用予定の Santa Barbara Corpus of American English (SBC)から抽出していたため、コーパスのサイズを統一するために、ICE のサイズに標準化して再計算したデータを用いた (以下の“SBC”表記は標準化後のデータを示す)。

## 3. 結果と分析

### 3.1 形式

データは量的・質的分析を行い、統計的分析には SPSS(Ver. 23)を用いた。統計はカイ二乗検定を用い、第一種過誤と第二種過誤を考慮して、英語間の比較を行う際にはホルム法で修整を行った。まず、ICE-IND (S1A)からは 398 例(52 形式)の GE が抽出された。Aijmer(2013)、Takahashi(2015)によると、他のコーパスからは ICE-SIN: 412 例、SBC:328 例、ICE-GB:262 例、ICE-PHI: 222 例、ICE-HK: 158 例の GE が抽出された。カイ二乗検定を行うと、会話における GE の頻度に関して、シンガポール英語とインド英語 ( $\chi^2=0.242$ ,  $df=1$ ,  $p=.0623$ )、またイギリス英語とフィリピン英語( $\chi^2=3.306$ ,  $df=1$ ,  $p=0.069$ )の間には有意差が見られなかったが、それ以外の英語間には有意差が見られた。このことは、インド英語話者がシンガポール英語話者と並び、会話で高い頻度で GE を用いることを示している。ICE-IND の GE のうち、「文末」に出現したものは 241 例(60.6%)であり、このうち 207 例は話者交替が起こる直前に出現した。

GE を順接 (and で始まる) と離接 (or で始まる) の観点から分類すると、ICE-IND においては 71.4% (30 形式) が順接、26.9% (21 形式) が離接であり、1.7% (1 形式) は接続詞なしであった。[1]が順接

の GE の具体例、[2]が離接の GE の具体例である。GE は太字・斜体字で示した。

[1] Yeah but in those days they very <,> uhm that way very sophisticated people very traditional and we keep a very have etiquette **and all these things** (ICE-IND:S1A-008#203:1:A)

[2] Man of achievement in Asia **or something like that** they are probably <,> (ICE-IND:S1A-045#47:1:B)

図 1 は各コーパスにおける GE の順接・離接の割合を示している。Aijmer(2013)は「接続詞なし」のカテゴリーを設けずに順接カテゴリーに含めていたので、比較を可能にするため、ICE-IND・ICE-PHI・ICE-HK の「接続詞なし」カテゴリーを順接カテゴリーに合わせて再計算した。順接・離接の GE の割合について、各英語間には差異が見られ( $\chi^2=74.382$ ,  $df=5$ ,  $p=0.000$ )、インド英語における順接の割合が、他の英語における順接の割合より有意に高いことが明らかとなった。

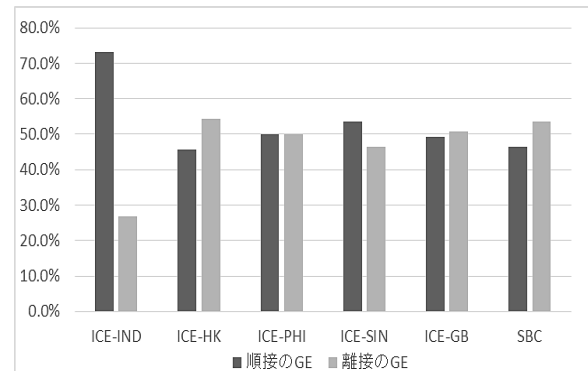


図 1: 順接の GE と離接の GE

ICE-IND には表 1 のように 52 形式の GE が出現した。出現度数が同じ形式は、同順位として示した。表 1 に示したように、ICE-IND で 10 例以上出現した形式は、and all(34.2%)・and all that(18.1%)・or something(11.3%)・or something like that(4.8%)・and everything(3.5%)・and all those things(2.8%)であった。ICE-IND の GE において、and all those “things”のように、thing(s)もしくは stuff の総称名詞が独立して使われていた例は 37 例 (9.3%) あり、stuff が用いられていたのは 1 例のみであった。総称名詞が使われる割合は ICE-GB(50.0%)と SBC(28.7%)の 2 つの内圏の英語で高く、アジア英語では ICE-HK(15.2%)、ICE-PHI(10.8%)、ICE-SIN(9.7%)、ICE-IND(9.3%)と低かった。アジア英語の中で stuff の割合が thing(s)の割合よりも低いのは ICE-SIN と ICE-IND であった。

表 1: ICE-IND に出現した GE の形式

順位		順位	
1	and all (136, 34.2%)	8	something like that (7, 1.8%)
2	and all that (72, 18.1%)	9	and all these things, or anything, or anything like that (5, 1.3%)
3	or something (45, 11.3%)	10	and all this, or so (4, 1.0%)
4	or something like that (19, 4.8%)	11	and things like that, and all those, and that, or somebody, or what (3, 0.8%)
5	and everything (14, 3.5%)	12	and all other things, or like that, or some such things, 他 4 形式 (2, 0.5%)
6	and all those things (11, 2.8%)	13	and something like that, and sort of things, or that sort of thing, 他 23 形式 (1, 0.3%)
7	and so on, or whatever (8, 2.0%)		

ICE-HK, ICE-PHI, ICE-GB, SBC で最も高頻度で出現した形式は or something (16.5%, 26.6%, 23.3%, 30.2%)であり、この中では or something の割合が低い ICE-HK は、代わりに or something like that (15.2%) も高頻度で出現した。ICE-IND においても or something が 3 番目に多く出現したが、GE 全体における割合は 11.3%で、or something like that が 4.8%であった。ICE-IND で多く出現した and all と and all that は、これら 4 つのコーパスにおいては、ICE-PHI における and all that (8.6%)の他は、各コーパスの GE に占め

る割合が 2.5%以下であった。ICE-SIN においては *and all that* (29.1%)が最も多く、次は *or something* (15.3%)であった。ただし、*and all* は 4.6%であった。よって、インド英語話者が高頻度で用いる GE の形式は、シンガポール英語話者が高頻度で用いる形式と共通点が見られるが、アメリカ英語など他の英語話者が頻繁に用いる形式とは傾向がはっきりと異なった。

また、*or something like that* といった比較語を含む長形式と、*or something* といった比較語を含まない短形式に分類することもできる。内圏の英語では短形式の GE の割合が SBC で 85.6%、ICE-GB で 82.8%と高い。アジア英語の中では ICE-IND における短形式の割合が最も高く 82.7%であり、ICE-SIN における割合も 78.9%であった。ICE-PHI では 73.4%、ICE-HK では 62.7%と、他の英語に比べると短形式の割合が低かった。

### 3.2 機能

GE の機能面に関しては、既述のように、先行研究において様々な機能が特定されてきた。GE はいくつかの機能を同時に担うことができる(Cheshire, 2007, p.183)ため、ICE-IND の機能面については、先行研究 (Aijmer, 2013; Cheshire, 2007; Dines, 1980; Overstreet, 2005; Takahashi, 2015; Wagner et al. 2015 など)で明らかにされた機能を参照しつつ、質的な分析を中心に行うことにした。具体例は明確になるよう、ポーズ以外のマークアップ記号は削除し、着目した GE を太字・斜体字で示した。

まず、GE の主要機能としては、Dines(1980)が提示した *set-marking* が挙げられ、ICE-IND においても、*and all*, *and all that*, *and things like that* といった特に順接の GE に *set-marking* の機能が見られた。例[3]における順接の GE の *and all that* は、Chamundi Hill が Bangalore と Mysore で発話者が訪れた様々な場所の、あくまで 1 つの例であることを示している。

[3]We were when we were studying <,> you had come <,> Bangalore and Mysore <,> And so we had been to all these Chamundi Hill ***and all that*** <,> So if I go there now I'll be reminded of my college days  
(ICE-IND: S1A-029#225:1:A~#227:1:A)

また、GE の機能として、Aijmer (2013, pp.140-145)などではポライトネス表示が挙げられている。ICE-IND において、例えば[4]で 2 人の話者はディーワリー（ヒンドゥー教の新年の祝祭）について話しており、B が用いた *and everything* はディーワリーに必要な準備が 2 人の間で共通認識となっていることを示し、ポジティブ・ポライトネスの機能を担い、グループ・アイデンティティが表示されている。例[5]において、C はトピックを提案した後に *or something like that* と付け足すことで、B に提案を押し付けないようにしている。よって、この GE はネガティブ・ポライトネスの機能を担っている。今後、より細かな量的な分析を行って確認する必要があるが、ICE-IND においてポライトネス表示の機能をもつ GE のうち、ポジティブ・ポライトネスを示すものは順接の GE、ネガティブ・ポライトネスを示すものは離接の GE が主であった。

[4] B: So so really if you started seven till nine pooja and decoration ***and everything***  
A: That you must do previous day na (ICE-IND:S1A-065#190:1:B~#191:1:A)

[5] B: So which topic  
C: So why why not talk something about the social <,> and all <,> problems ***or something like that***  
(ICE-IND:S1A-056#45:1:B~#46:1:C)

さらに、「曖昧表現」の一種である GE は、あえて発話の曖昧度を高める場合にも用いられる(Fernandez

& Yuldashev, 2011)。例[6]のトピックはビザであり、B のビザに関する情報は不確かなため、GE を使って曖昧にすることで、発言内容の正確さに自信がないことを示している。また、時間や数値が「おおよそ」であることを示したり、上述のネガティブ・ボライトネスを示したりするために、GE が発話の曖昧度を高める機能を担う場合もあった。

[6] A: [...] because <> normally once he goes <> he just quits that company and joins another company there

B: But that uh <> H H one visa *or something* has change no (ICE-IND:S1A-045#129:1:A~#130:1:B)

ICE-IND の GE には、これらの機能の他に、話者交替の表示、強調、感情の表現といった機能が見られた。このことは、インド英語において GE が担う機能自体は、他英語において GE が担う英語と共通していることを示している。機能面に関する量的な分布については、さらに分析をする必要があるが、インド英語には順接の GE が高頻度で出現したため、順接の GE に結びつく *set-marking* の機能を担うものが多く、文末に出現したり、もしくは文中でも話し相手が相槌を打てる短いポーズを伴ったりして、会話を促進するために用いられる例も多く見られた。

#### 4. 考察

本研究によって、インド英語話者はシンガポール英語話者と並んで、GE を会話において多く使用することがわかった。また、短形式の割合が高い点、*or something* が最も頻度が高い GE ではない点、総称名詞の使用率が低い点において、インド英語話者とシンガポール英語話者の GE 使用には共通点が見られた。これらの傾向はアメリカ英語・イギリス英語・香港英語・フィリピン英語話者に使用される GE の傾向とは異なっている。香港英語話者・フィリピン英語話者の使用する GE は、内圏の英語話者と異なる点もいくつかあるものの、共通した傾向が多く見られる(Takahashi, 2015)。このように、インド英語話者とシンガポール英語話者の GE 使用（形式面）には共通点が多いものの、インド英語話者が最も頻繁に使う GE である *and all* が、シンガポール英語話者にはあまり使われないなど、細かい分布は異なっていた。また、シンガポール英語話者も含め、他の英語話者に比べて、インド英語話者は順接の GE を高い割合で用いることがわかった。よって、インド英語話者が用いる GE には、形式面において他英語話者との違いがあることが明らかとなった。一方、*set-marking*、ボライトネスの表示、発話の曖昧度を高めるといった GE の主要機能自体は、他英語の GE に見られる機能と共通していた。その中でも特に、順接の GE に結びついた *set-marking* の機能、また、文の区切りに現れて相手の反応を引き出し、会話を促進する機能をもつ GE が多く見られた。

インド英語話者が GE、特に順接の GE を高頻度で用いることには、インド英語では会話を促進するために語用標識が高頻度で用いられることと関連している可能性がある。例えば、アジア英語話者の中で、インド英語話者は付加疑問文を促進の機能で用いることが多い(Takahashi, 2014, p.116)。また、ヒンディー語由来の *ah, na, haan* などを含む、*no, right, okay* といった不変化タグも会話を促進する際に用いられる(Takahashi, 2016, p.200)。同時に、短形式の割合等、香港・フィリピン英語ではなく、シンガポール英語に似た傾向も見られたのは、アジアの中ではシンガポールとインドで特に、英語の地域的特徴の発達が進んでいる(Schneider, 2014)ことを反映する可能性があると考えられる。

#### 5. 結論

本研究では、インド英語話者が使用する GE の形式・機能の特徴を、内圏・外圏の 5 つの英語話者が使用する GE との、コーパスを用いた比較を通して記述・分析を行った。インド英語話者が会話で使用する GE は特に形式面において、内圏の英語であるイギリス英語・アメリカ英語話者、また外圏のアジア英語であるフィリピン英語・香港英語と異なる傾向を示すことが明らかとなった。ただし、シンガポ

ール英語とは順接の GE の割合など、異なる傾向を示す一方、総称名詞の使用率などの共通点も見られた。機能面においては、GE の主要機能自体は英語間で共通であり、インド英語では順接の GE に結びついた *set-marking* や、会話の促進のために GE が用いられる例が多くあった。本研究では拡大圏の英語を扱っていないため、インド英語の GE の形式的特徴が地域的発達の結果なのか、より多くの英語を分析して判断する必要がある。また、機能に関しても今後、より細かな量的分析を行う必要がある。本研究を通して、インド英語における *general extenders* には他英語と異なる特徴があり、会話の中で効果的に用いられていることが明らかとなった。

## 6.参考文献

- Aijmer, K. (2013). General extenders. In *Understanding pragmatic markers: A variational pragmatic approach* (pp. 127-147). Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Anthony, L. (2011). AntConc (Version 3.2.4w) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/>
- Cheshire, J. (2007). Discourse variation, grammaticalisation and stuff like that. *Journal of Sociolinguistics*, 11(2), 155-193.
- Crystal, D. (2012). *English as a global language* (2nd ed.). Cambridge: Canto Classics.
- Dines, E.R. (1980). Variation in discourse“and stuff like that”. *Language in Society*, 9(1), 13-31.
- Fernandez, J., & Yuldashev, A. (2011). Variation in the use of general extenders and stuff in instant messaging. *Journal of pragmatics*, 43, 2610-2626.
- Gupta, A. F. (2010). Singapore Standard English revisited. In L. Lim, A. Pakir, & L. Wee (Eds.), *English in Singapore: Modernity and management* (pp. 57-89). Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Jucker, A.H., Smith, S.W., & Lüdtke, T. (2003). Interactive aspects of vagueness in conversation. *Journal of Pragmatics*, 35, 1737-1769.
- Kachru, B. B. (Ed.) (1992). *The other tongue: English across cultures* (2nd ed.). Urbana: University of Illinois Press.
- Kachru, Y. & Smith, L. E. (2009). The Karmic cycle of world Englishes: some futuristic constructs. *World Englishes*, 28(1), 1-14.
- Levey, S. (2012). General extenders and grammaticalizaion: Insights from London preadolescents. *Applied Linguistics*, 1-26.
- Martínez, I.M.P. (2011). “I might, I might go I mean it depends on money things and stuff”. A preliminary analysis of general extenders in British teenagers’ discourse. *Journal of Pragmatics*, 43 (9), 2452-2470.
- Mukherjee, J. (2012). The development of the English language in India. In A. Kirkpatrick (Ed.), *The Routledge Handbook of World Englishes* (pp. 167-180). London and New York: Routledge.
- Overstreet, M. (2005). And stuff *und so* : Investigating pragmatic expressions in English and German. *Journal of Pragmatics*, 37, 1845-1864.
- Overstreet, M., & Yule, G. (1997). On being inexplicit and stuff in contemporary American English. *Journal of English Linguistic*, 25, 250-258.
- Schneider, E. W. (2014). New reflections on the evolutionary dynamic of world Englishes. *World Englishes*, 33(1), 9-32.
- Sedlatschek, A. (2009). *Contemporary Indian English: Variation and change*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Shastri, S. V., & Leitner, G. (2002). *The ICE-India Corpus. Version 1*. Retrieved from <http://ice-corpora.net/ice/download.htm>.
- Tagliamonte, S.A., & Denis, D. (2010). The stuff of change: General extenders in Toronto, Canada. *Journal of English Linguistics*, 38, 335-368.
- Takahashi, M. (2014). A comparative study of tag questions in four Asian Englishes from a corpus-based approach. *Asian Englishes*, 16(2), 101-124.
- Takahashi, M. (2015). A comparative study of general extenders in Hong Kong English and Philippine English: A Corpus-Based Approach. 「比較文化研究」(*Studies in Comparative Culture*), 115, 59-71.
- Takahashi, M. (2016). A corpus-based comparative analysis of indigenous invariant tags in Asian Englishes: Features, usage, and registers. In R. Muhr, K. E. Fonyuy, Z. Ibrahim, & C. Miller (Eds.), *Pluricentric languages and non-dominant varieties worldwide: Pluricentric languages across continents- features and usage* (pp. 191-207). Wien, Frankfurt, and Main: Peter Lang Verlag.
- Wagner, S. E., Hesson, A., Bybel, K., & Little, H. (2015). Quantifying the referential function of general extenders in North American English. *Language in Society*, 44, 705-731.